

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 総 第 5 号	氏 名	村田 真実
審査委員	主 査 副 査 副 査 副 査	高橋 晋一 平井 研 松 午 岸 江 信 子 真田 信治	
学位論文題目 統計手法を用いた諸方言アクセント分類の実証的研究 ー京阪式アクセントと讃岐式アクセントを中心にー			
<p><b>審査結果の要旨</b></p> <p>本学位請求論文は、査読制のある権威ある学術雑誌の『文理シナジー』掲載の主論文、および『言語文化研究』『徳島大学国語国文学』『音声研究』掲載の3編の副論文を主軸にして新たに執筆された学位請求論文である。</p> <p>論文は、統計学の手法を方言学（アクセントによる方言区画論）に援用し、徳島県内のアクセントデータに基づく方言区画のモデルを提示することを目的としたものである。方言学におけるこれまでのアクセント研究は体系的記述が主流であったが、村田氏の研究は、統計的手法（多変量解析）を援用して客観的な視点からアクセントの分析を行う方法を確立した点、またその方法を徳島県のアクセントの事例に適用し、従来の方言区画を客観的に見直し、地域間の類似点を計測した点に独創性・新規性があり、大いに評価される。</p> <p>論文の構成は以下の通りである。序章で研究目的・方法を明示した上で、第1章では徳島県下の諸アクセント体系を概観、第2章では徳島方言アクセントに関する研究史を整理している。第3章以下が本論文の核心部分であるが、まず第3章では、吉野川中流域における同一類内のアクセント分裂現象について、ロジスティック回帰分析を用いて分析、分裂の背後にある規則性を見いだした。第4章では多変量解析（コレスポネンス分析・クラスター分析）を用い、吉野川南岸に分布する京阪式アクセントと讃岐式アクセント池田型の境界線の位置を、統計的手法を用いて明らかにしている。第5章では多変量解析に自己組織化マップ（SOM）を加え、徳島県のアクセント区画の再検討を行った。先行研究では6つに分類されていたアクセント体系を4つに分類し直し、それぞれの体系間の遠近を確認した。第6章（終章）では、本研究の意義と今後の展望について整理している。付録論文では、近畿地方の京阪式アクセントに起こっている2拍名詞第4・5類の統合現象の広がり方から、徳島型アクセントの位置づけを行っている。</p> <p>村田氏の論文の研究目的は明確で、先行研究を十分ふまえた上で問題設定を行い、徹底的な現地調査と文献研究によって得られた豊富な調査データを用いて分析を進めている。論文全体の構成、論旨展開も明快・妥当で首尾一貫しており、当初設定された課題に対する明確かつオリジナリティのある結論が提示されている。氏の論文で提示された多変量解析を中心とする統計的分析手法は、全国各地のアクセントについての分析にも援用でき、日本諸方言アクセント区画の再整理、日本各地に点在する同一類内のアクセント分裂現象の分析などにも展開可能である。また、アクセント以外のジャンルにも適用が期待される。方法論の観点から、氏の研究は今後の方言研究の発展に大きな寄与をなすものと考えられる。</p> <p>研究テーマ、分析方法、結論等には注目すべき独創性が認められ、研究成果は今後の方言研究の発展に貢献する学術的価値を有すると判断される。論文の内容・形式から、高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の倫理観、技術力、研究能力を有していることもあわせて示された。なお、文理融合の総合的な視点から地域科学的な研究を行っているという点においても、村田氏の論文は、本学大学院地域科学専攻の学位論文にふさわしいものと言える。</p> <p>以上、本研究は本教育部の博士論文としての一定の水準に達するものであり、博士（学術）の学位に相当するものであると考える。</p>			